

さんこう昔話文庫

第8話 沙地翁物語

今からおよそ1250年前、山国川が御木川(みきがわ)と呼ばれていたころ、上流の山国地方には大森林が繁茂していた。この木を農民は伐り出し、筏に組み、大きいものはそのまま御木川に流して中津まで運んだ。途中に3か所の難所があり、その一つが土田の「兎飛び」である。ここは兩岸壁が接近して急流となり、木流しには危険であった。農民はこの難所を越すと一安心して、この付近で一夜を明かす。

ところがこの農民を待ち受けて、運んで来た木材を奪う盗賊が出没し、手向う者は殺してしまうこともあった。盗賊は付近の集落を襲っては牛や鶏を盗み、若い娘をさらった。

そのころ、百歳を越したかと思われる沙地(さち)翁(おう)という老人が住んでいた。頭髪やひげは真白であったが、壯者をしのぐほどの元気者で、この地方の「かしら」として、人びとの尊敬を集めていた。弓術にたけ、3つ向うの山を走る鹿も射止めるほどであった。

翁は盗賊の横暴を聞き、平定せねばと心に決め、ある朝、住民たちを集めて決心のほどを伝え、今夜行くが、もし明朝まで帰って来なければ、わしに代わって勇山(いさやま)の麻呂がこの地を治めるようにと告げ、人びとの止めるのも聞かず出発した。何とか殺さなくて説得し、真人間になるように改心させる方法はないか、と思いながら盗賊の住む岩穴に着いた。盗賊たちは翁を殺そうと走り寄って来た。翁は今はこれまでと、弓に矢をつがえて放った。矢は先頭と次の者の衣を縫いあわせてしまった。すると不思議に、この矢から急に銀白色の光線が放たれ、かすかなうなりさえ生じた。盗賊は目がくらみ、坐り込んだ。翁は彼等の所に行って、その非を論じた。

改心した賊は、筏に乗せられて下流へ送られることになった。筏が岸を離れようとした時、銀白色の兎が現われ、翁に向かって「私は古くからこの地に住んでいる守護神である。あなたの愛郷心に感応して、あなたの射た矢に加護を垂れた。あなたはこの地を治めなさい」と告げて、御木川を飛び越え、求菩提山(くぼてさん)の方へ去って行った。「兎飛び」の名はこれから起こったという。

